

## 令和5年度第2回島根県総合教育審議会

日時：令和5年9月13日（水）

13：30～15：30

場所：サンラポーむらくも 瑞雲の間

### ○会長

本日、第2回ということなので、前回、第1回に県教委のほうで御検討された基本的な方針（案）というものがあって、それについては既に御説明いただいたんですけども、少し時間もたっておりますので、もう一度その基本的な方針（案）について復習をして、それから入りたいというふうに思っておりますので、最初に県教委のほうから御説明をお願いいたします。

### ○事務局

お手元にごさいます、江津地域の今後の県立高校の在り方についてというペーパーを御覧ください。

1、基本的な方針（案）ということで、方針について確認をさせていただきたいと思えます。1ポツ目、江津地域の子どもの進路の選択肢の確保と、教育活動の充実を最優先に考え検討する。2ポツ目、1学年2学級の江津高校と江津工業高校を統合し、新たに1学年3学級の高校を設置する。3ポツ目、江津高校が築いてきた地域連携による進学を念頭に置いた学びを継承する。4ポツ目、江津工業高校の伝統を生かすとともに、県西部の工業教育へのニーズに対応できるよう、工業教育のさらなる魅力化を検討する。5ポツ目、工業教育の実習施設・設備が必要なことから、新設校は江津工業高校の場所を念頭とする。6ポツ目、開校する時期は、教育課程の検討と、それを踏まえた施設整備のため、令和10年度前後を想定する。この6つのポツで基本的な方針（案）としております。

開設校のイメージは下の表のようにしております。進学を念頭に置いた普通科系の学びと、工業教育のさらなる魅力化という2つの想定される学びを、それぞれ2コースと4コース設けまして、1学級、2学級として、1学年当たりの学級数を2学科3学級としているところでございます。以上です。

### ○会長

ありがとうございました。

そうしましたら、本日のところは、先ほどからありますように、地区の代表の方々4名

をお招きしておりますので、それぞれに、それぞれのお立場からお話をいただければというふうに思っております。お聞き及びと思えますけれども、お1人当たり15分ぐらいで説明をしていただき、その後5分間、委員の方々からの御質問や何かがありまして、お1人当たり合わせて20分という時間を想定しており、掛ける4人ですので、80分ということで進めていきたいというふうに思っているところでございます。

そうしましたら、順番に、まず、田中利徳教育長様からお願いをしたいと思います。

## ○田中氏

それでは、江津の教育について少し話させてもらいます。教育風土といいますか、これが土壌になるわけですが、芽が出た子どもたちをどう伸ばすかということで、今、苦慮しているところです。今、大きな教育改革の流れがあつて、土壌の新しい、土壌改革をしないといけないのですが、なかなか進みません。そんな中で、どういうふうに育てたらいいか、毎日考えているところです。江津市の教育ビジョンとしましては、令和3年度に策定しました教育大綱にあるんですが、その中の教育ビジョン「ふるさと江津を愛し、豊かな心で、明日を創る人」という、このスローガンの下で、今、教職員、保護者、地域と一体となって、子どもたちの教育に当たっております。

それで、市内7校、966名の小学生、それから中学生が4校で456名と、随分減っておりますけども、元気いっぱい教育に打ち込んでいる状況です。それで、江津の教育を語る場合に言えるのが、江津市ふるさと教育、キャリア教育ということを推進しております。江津のひと・もの・ことを生かした職場体験やまち探検、地域課題解決型学習などの体験的な学習を通して、ふるさとへの愛着と誇りを育むとともに、今の学びと未来の生活のつながりを常に意識して、児童生徒の自立を目指す教育を推進しております。本市では、今年度から社会教育主事を派遣していただきまして、学校と地域の連携強化に努め、中学生の職場体験や小・中学校で取り組む、先ほど申しました江津市ふるさとキャリア教育の積極的な推進を図っております。

そして、もう一つですが、地域コミュニティ・スクールの導入に踏み切りました。今年度は、モデル校を1校指定して、今、地域との話合いの中で組織を立ち上げ、行く行くは来年度準備をして、令和7年には、市内全小・中学校でコミュニティ・スクールを導入することとしております。これによりまして、地域と学校一体になって、子どもたちの教育に全力で取り組んでいこうということにしております。

そして、先ほども会長さんの話からもありましたが、江津で育てた子どもたちが行く先

として、江津にあります県立高校に求めるものということで話をさせてください。まず、具体的に話してみようと思います。江津工業高校です。昭和9年に誕生しております。来年度で90周年だそうです。そういうふうな中で、本当に工業立国日本を支えたといっても過言ではないと思いますが、関西方面中心に、地元もですけども、技術者を輩出してきた学校です。江津はかつて山陰の工都と呼ばれたぐらい工業の盛んなところですが、現在も、これ製紙会社なんです、セルロースナノファイバーという新素材を作る工場として世界をリードする会社となっております。それから、赤瓦が見えていますけども、伝統の瓦工場、鋳産業を中心とした地場産業。それから、これが工業団地です。今、用地が足りなくなったので、それで、第3期工事として、こちらの枠で囲んでありますが、今、造成を県のほうでもらっております。ここに企業進出が続いておるということで、それで、江津工業の果たす役割がますます大きくなる。工業団地の中の企業では、工業高校からの雇用を想定して進出してきた大阪の企業もあります。そういうふうなことで、進出企業からも大きな期待をされている学校ではないかと思えます。

それで、これは学校関係者の言葉があったんですが、江津工業に来る子どもが、志を持って、わくわく感を持って来てほしいなという、教員なんです、そういう言葉を聞きまして、さあ、どうすればいいかということで、まず、そのためには小・中学校のときから地元の企業なりを知る機会があったほうがいいじゃないかということで、昨年、企業訪問、昨年は校長会のメンバー全員で江津市内の企業を回っていました。感想としては、初めて見たというふうなことでした。その高評価を受けまして、今年度は夏休みの8月2日と8日、2回にわたって企業訪問、義務教育の先生方に実際に企業を訪問していただきました。その中のアンケートを見ますと、1つの会社で大型タンカーのスクリューの関係する部品をつくっている会社があります。それを見た女先生でしたが、江津で生産された部品を使った大型タンカーが世界の海を駆け巡るのには誇りを感じたというふうなこととか、それから、ぜひ、ふるさとキャリア教育の中で使ってみたくさんの材料を見せてもらったというふうな感想がありました。そういうふうなことで、これから小・中学生に、今度は実際に児童生徒も会社訪問なんかもさせてみたいなと思っております。

それで、あと江津工業に求めることとして、近くにポリテクカレッジがあります。その辺と、何を学び、何ができるかということで、企業側、産業側からは非常に要望がたくさんあると思うんですが、教員の配置であるとか、いろいろな専門性がありますので難しいと思いますが、一人一人の子どものニーズに応えることができればと思いますが、それで、

地元企業やポリテクカレッジ、島根大学もこの前提携を結びましたので、一緒になって子どものニーズに応えていけるような幅広い教育をしていただきたいなと思っております。

それから、続いて、江津高校ですが、昭和32年に、地元で普通科高校が欲しいという強い要請に応えた形で誕生しております。それまでは、普通科あるいは商業科は、江津からは全部浜校に通っていました。そういうことで、今も浜高も江津高校もあるわけですが、やはり部活動をする時間等を考えると、本当に自転車で行く範囲にあるということは、非常に大切なことだと思っております。それから、今、ふるさと教育で学んだことを、江津高校に行った生徒は引き続き、県のやっております県立学校コンソーシアム、後ほど藤田さんから話がありますのでこの辺で置きますけども、地域と共に地域で学ぶということで、積極的に地元のほうに出て、高校生が学んでいます。それとか、社会人の方との討論を通じて、自分の未来を見詰めるとか、そういうふうな取組をしっかりといただいています。それで、昨年、江津市と県立大学との間で包括的連携協定を結びました。そんな中で、今の社会に出て学ぶ、さらに広げる、地域政策学部とかその辺との関連をしてもらえば、もう少し高校の段階からいろんな要求が湧いてくるんじゃないかなというふうに思います。

それで、江津高校は普通科でありますので、その辺で特色ある教育をもう少し仕掛けてみてはどうかと思います。1つの例ですが、かつて英語科の設置校であったということで、そういうふうな、英語に関する伝統といいますか、あれほど社会に出て学ぶ、さらに日本を飛び出して、いろんな、例えばアメリカに留学するとかして、県立の普通科ということで、やや余裕も持ってカリキュラムも組めるんじゃないかと思っておりますけども、2年の学年にでもいいですから、3か月なり2週間なり、外国を経験するというふうなことで、今、求められております新たなグローバル人材の育成というふうなことに取りかかればどうかと思っております。

それで、今、この「トビタテ！」というのは御存じでしょうか。民間企業から融資してもらって、文科省が主幹としてやっております。年間700名の高校生が海外で勉強しとるんですが、島根県からはまだ数名行ったかどうか分かりませんね。そういうことで、経費は大体この「トビタテ！」が出して、3か月大体95万円ぐらい補助、奨学金として補助が出ます。そういうことで、今、第2期が始まっておりまして、3年から実施中です。今年度はもう締め切って、そろそろ行つとるんじゃないかと思っておりますけども。残念なことに、第1次の結果を見ますと、98とかいう数字も見ましたけども、90%以上首都圏の高校生が行っています。それだから、先輩が行ったからということで興味を持って行く生徒も

おると思うんですが、私も江津高校、浜田高校、その辺もパンフレット持って歩いてはおるんですが、今まで1人ですね、江津高校の子、今、県大に行っていますけども、挑戦したんですが、英語にあまりにもこだわり過ぎていいですか、ちょっと不合格になったことがあります。それでですね、今回こういうふうなローカルルール、地方の子にもチャンスを与えようということで、こういうのがありますので、積極的に応募すればできるんじゃないかなと。それから、ダンスがしたいとか、それでもいいですよ、いろんな。それから、江津工業の生徒もチャンスがあると思います。いろんな意味で仕掛けをしていく、教育は仕掛けとも言いますが、仕掛けをして魅力づくりをすれば、生徒も集まるんじゃないかなと思っております。

そして、最後ですが、普通科としての機能を充実させて、江津の今課題であります医師不足、教員不足の解消、江津生まれ、江津育ちのお医者さん、先生が誕生すればいいかな、その点はやっぱり普通科高校でしっかり学んでほしいなと思っています。それで、生徒が少なくなってきましたと、いろいろ教員の配置であるとかありますけども、その辺は十分にまた県のほうでも手当てをしていただいて、もう一つは、最近ICT教育ということで、オンラインの授業を全国で展開します。特に離島なんかは、例えば物理の先生がいない、それはオンラインで授業として認めるといような動きがあります。センターがあつて、そこから配信するんです。そういうふうなこと等ありますので、いろんな進路をですね、理系であるとか文系であるとかなしに、本当に江津の子どもたちが希望して行くなら、そのまた上に、大学に向かっての希望もかなえてやってほしいなと思っております。

市内にあります2校ですが、さらなる魅力化と充実をして、江津で育てます小・中学校の児童生徒が本当に胸躍らせていく高校になればよいと思っております。これ小学校の6年生ですが、このように育った子が、地元、そして世界で羽ばたくということ、私の夢であります。魅力ととわに発展する県立高校ということで、私のほうからは江津の子どもたちが求める県立高校ということで意見を述べさせていただきます。

## ○会長

ありがとうございました。

そうしましたら、委員の方から質問をとということで、あまり時間はないですけども、お願いいたします。

教育長さんというお立場ですので、統合ということについてどうかという御意見は控えられたと思いますけれども、それぞれの高校の特色を生かして、さらに発展していければ

というお話をいただいたかと思います。

委員の方から、何か御質問お願いいたします、いかがでしょうか。

#### ○委員

江津工業なんですけども、今、2学級あるんですけど、江津工業の卒業生のうち地元企業に就職した人の割合は分かりますか。

#### ○田中氏

ちょっと分かりませんが、今、江津で若者とといいますか、40代、50代でいいますと、地元で残っているのはほとんど江津工業の卒業生ですね。江津高校の卒業生はあんまり見かけませんので。そういう意味では地元に残って活躍されているのは、今の年代で40、50、60代で見ると江津工業の人が本当に多いと思います。

#### ○会長

私たちの手元にあるデータですと、江津の中学校を卒業されて、市内4校あって、そこからの卒業生で、進学された方の中で工業に行かれた方が、この3年間ですけど12%ぐらい。先ほどあったように、ふるさとキャリア教育の中で、小・中学校の段階から地元企業を知る活動を広げていっておられるということで、これが伸びていけばいいなと思うんですけど、もし現在12%ぐらいの進学率なんだけど、もう少し目標を持って、高くしていくっていうお考えはありますでしょうか。

#### ○田中氏

やっぱり今の、先ほど言いましたように、企業訪問なり、実際に私もこの前行って見たんですが、行ったことないところ初めて行きました。そういうことで、行く行くは保護者にも、こういう取組をして一緒に考えてもらえれば増えていく。それから、先ほども申しましたように、何を学ぶことができるかということが大きなウエートを占めると思いますので、電気科だとか、科があるんですけど、その辺のところやっぱりもう少し考慮する必要があるかなと思います。

#### ○会長

ありがとうございます。

今、工業12%というふうに申し上げたんですけども、江津高校には27%の中学校進学者が、この3年間ですね、平均すると入っているということです。ほかにも私学がありますし、あるいは、江津市外に出ていく方もある。教育長さんとして、地元の高校に進学させる方について、何か目標値などを持っておられますかという質問をしたつもりです

けれども。

#### ○田中氏

できるだけ多くということしか言えんと思いますけども、江津高校もいろいろな活動の中で徐々に増えつつある。地元から行ってくれる子が非常に増えてきているかなとは思っています。そういうことで、県立普通科でなければできないということで魅力づくりをしていけば、もう少し生徒が集まるんじゃないかなとは思っていますけども。

#### ○会長

ありがとうございました。

ほかに、委員の方々からいかがでしょうか。

#### ○委員

江津生まれで、江津育ちで、そして、市の教育長さんをされているということで、教育に対する思いが本当に大きいものと感じました。でも、教育長さん、もし大事にするところ、すごく重んじるところ、例えば、本当のこれからの子どもの将来、それから、そこで育つ、生活する保護者の問題、それから地域活性化、いろんなことがあると思うんですけど、江津生まれで江津育ちの教育長さんとして、もしこれからの公立高校のことを考えたときに、どこに一番重点を置かれますでしょうか。

#### ○田中氏

そうですね、やはり地元思い、例えば外に出ても帰ってくるといいますか、よく地域おこしでは、大事なはその地域で育った者がリーダーシップを発揮するということがよく言われますけども、そういうことで、今取り組んでおりますふるさと教育なりをしっかりとやっていって、それで、ふるさとへの思いを持って、例えば江津工業出て残る、地元で活躍する、あるいは一旦は都会へ出るけども帰ってくるというふうなことができればいいかなと思っています。まずは義務教育でしっかり力をつけ、県立高校に預けて、また力をつける。力があれば必ずふるさとを思う気持ちも育ってくると思いますので、そういうふうなことを思いを持って粘り強くやろうと思っています。

#### ○委員

ありがとうございました。

公立の高校ということは万人向けということですよ。突出して何かじゃなくて、やっぱり万人向けということであって、なかなか市町村の思いだけではなかなか進むことができないと思いますけども、もし、その子どもたちが帰ってきたときに、ああ、ここにそれ

があったと思えるような、そういう誇りに思えるような、どうか教育づくりをしていってくださいますようお願いいたします。

#### ○会長

それでは、時間となりましたので、次の方に移りたいと思います。

田中教育長、ありがとうございました。

#### ○会長

そうしましたら、次に、江津高等学校の学校運営協議会の会長をされております有間会長さん、有間茂善会長さんのほうからお話をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

#### ○有間氏

今の江津高校の校長先生の田村先生と、学校運営協議会の会長連名で、7月11日に島根県教育委員会様ってということで書類を出しているんです。学校運営などに関する意見の申出ということで、島根県立高等学校規定21条の14で書いてあって、学校運営に関する意見を下記のとおり申し出ますということで、これ、学校運営協議会のメンバーとかとちょっと練って、至急集まって話し合いをしたんですね。その時点では、島根県教育委員会が示した江津高校と江津工業高校を統合した新たな高校を設置する基本的な方針案に強い不安と疑念を抱いており、島根県総合教育審議会に諮問される案について再検討を求めると。実は、半分以上の方は撤回を申し入れるという、もっと強い言葉だったんですけど、そこは表現の仕方ですけど、再検討を求めるということにしましょうよということで、こういう書類を県の教育委員会の方に出しています。

それで、意見の背景としては、どういうことかといいますと、平成31年2月に策定された県立高校魅力化ビジョンでは、石見部全体での位置づけの議論ですべきだと。にもかかわらず、今回の方針案は江津地域のみが議論の対象となっている、資料1としているわけですね。それから、2番目が、今回の方針策定に当たり、県教育委員会は令和8年度における江津市内中学校卒業者のうち江津高校への進学者数及び江津市外からの進学者数の推計値を示していますが、この推計値の算出基準が不明である。これも資料を出しています。それから、3番目で、江津高等学校では、皆さんのところにも資料あると思いますが、令和2年度以後、入学者は増加しています。令和5年度、今年ですけども、充足率は82.5%なんですね。なんで、これはちょっと喜ばしいことですからという、この資料。それから、最後に、県教育委員会としての学級減や入学定員減に関する明確な基準がない



にもかかわらず、今回の方針では事実上、江津高校が、1学級減で、この統合案では江津工業高校が2学級で、江津工業というか、専門学科が2学級で、普通科学級が1学級になっていますね。これは江津高校に携わる者としては、感情的も含めて面白くないですよ。ただその分については、江津高校卒業生の人間については、今回はあまり感情論むき出しだとか、そういう案は、実は私が知っている限りはないんですね。こういう御時世だし仕方がないかっていう案もあります。でも、それよりもやっぱり子ども目線で、子どもファーストでいろんなこと考えてほしいというのが言われていますので、ということです。

まず、1つ目についてはそういうことで、江津高校の運営委員会のメンバーとしての立場としては、やっぱりちょっと違うんじゃないのと。今は江津高校自身はうまくいっています。確かに、定員に対して、80に対して充足率82ですから、いってないんじゃないかって言われるとそうかもしれませんけど、他の県立高校全て、僕も見させていただきましたけど、過半数以上の、真ん中以上より上にいますので。推計値が令和8年、令和10年と教育委員会の方は出されていますけど、これも江津市の生まれてくる子どもたちの推計値でいくと110人とか100ぐらいになりますっていうんですけどもね、これはどうなるか世の中分からないわけですね、あるやないですかと思うんですよ、少子化、過疎化ですから。だけど、同じパイを、僕は某私立高校も含めて市内の中に3つあるっていうことは、確かにマーケット的には非常に問題があるし、これは難しいよねと。ただ、某私立高校みたいに、バスを益田まで出して、大田まで出して、昔の三江線の山奥まで出して、少なくとも夜8時、9時まで動いて送り迎えしていると。これはもうアドバンテージはありますよね、絶対的に、保護者の目から見ても何にしてみても。

私、江津高校の運営会メンバーでは反対です。ちょっと時期尚早じゃないですかと言いたいんですけど、ここにある今日の2つ目の意見として、江津市民として、江津市として今後の教育の在り方、高校の在り方についてとなると、ちょっと冷静に考えてみると、少なくとも3週間前までは江津高校だけのことしか考えてなかったんですけども、冷静に考えてみると、2万3,000人、2万人になって、少子化になって、過疎化になって、学校が3つもあって、いろんなこと対策しても、本当にいいんだろうかと。いいんだろうかというよりは、むしろもう右肩下がりもいいところだと。ただ、そうは言いながら、一生懸命、江津高校の場合はいろいろやっているねと。隣に土井さんいらっしゃいますけど、待てよ、これ江津工業高校の救済策かなと思ったりね、言い方悪いんですけど。そういうことをも思ったりをするんですけど、いずれにせよ、江津地区から学校が減るとか多いと

かっていう問題じゃなくて、少なくとも多くても、これから生まれてくる子どもたちだとか、今待機している小学生、中学生がやっぱり一番選択肢が多くて、選びやすく、育ちやすい環境の学校をつくるんだと僕は思うんですね。

そうすると、やっぱり見直し論として、条件闘争をするっていうのは、まだ、どうされるかというのは、この諮問委員会で決められるんでしょうけど、それが決まった後に細かい条件闘争はしていいんであって、まず基本的な問題はね、ここでいろんな意見を聞かれて協議していただきたいと。私からの提案ですけど、これは教育委員会のヒアリングをされたときに私は何度も言ったんですけど、これいいとか悪いとかじゃなくて、参考にもしなくてもいいかもしれませんが、例えば鳥取県ルールとか、今度広島県ルール、今年、広島県答申されましたよね、28名とか。28名定員が切れると、3年後からは統廃合の検討に入りますよとか、鳥取は27とか。全国のホームページ見てもそういうことを都道府県でやっているところもありますんで。だから、そういう島根ルールをつくられたら、何か突然、後ろの方に申し訳ないんですけど、突然言われて、ううんっというんじゃなくて、納得感あるかなと。こういうことに関しては納得感の問題じゃないかもしれないんですけど。だから、今、島根ルール、言葉は悪いんですけど、何かね。そうすると、そりゃそうだよと、もう今でも2万3,000人のところで、年間に生まれてくる子どもが100人ぐらいしかいないのにおかしいねってことになっていますから。だから、ある程度やっぱりそこはロジックとしてはこういうこと。ただし、柔軟的に対応をしていただきたいと思うんですね。

それから、最後になりますけど、僕はそういうことで江津市民でもあり、都野津という江津高校がある住民でもあり、学校のOBでもあるんですね。二宮地区、こういうところは、実は小学校もあって、環境も非常によく、同じ江津市の中でも若い世代たちがそこに、移住環境がいいから、同じ山間部から出てこられて、新しいいわゆるコミュニティができていますね、住みやすいんです。これはまさしく少子化対策だと僕は思うんですね。ですから、固い、偉そうなことを言うつもりはありませんけど、やっぱりこれぐらい規模が小さい町だったら、政府が言う異次元の少子化対策なんて、そんな訳分かんないことじゃなくて、具体的に分かりやすいことっていうのは、やっぱり子育てがしやすい、いろんなことがあるわけじゃないですか、そういう環境の下なんですよ。

それは何を言いたいかっていうと、学校っていうのは、僕は光もんだと思うんです。ですから、帰ってきて、町の人とか友達とかみんなに、じいちゃん、ばあちゃんにも言うの

は、学校って光りもんなんだよ、高校もあって、小学校もあって、中学もあって、それで元気いいだろ、声が聞こえてって。これが、話は藤田さんからあると思いますけど、地元のコミュニティーがしっかり取れていて、今、まだ2年目ぐらいです、正確には。あと一、二年たったらもう少し実績が出てくるかもしれないし、これはどうなるか分かりませんが。だから、そういう意味で時期尚早、もう少し江津高校の場合は放っておいていただけませんかねということをお願いいたします。

それから、締めとしては、江津高校の特色っていうのは、私も最近もう4年間は、何かあれば、すぐ近いもんですから行きます。で、よく分かったのは、緩い学校なんですね。緩い学校、今風で言う。ですから、もう進学でがちがちで勉強勉強で行く人でもない。かといって専門課程で何かそこしかキャパシティーっていうか、幅がなくて、もうはめられちゃっているコース、そうでもない。取りあえず高校入ってみて、そこで1年ぐらいいろんなこと経験してみて、それから自分の進路を決めようと、その手段として地元の大人の人たちと折衝したり、いろんな教育、フィールド実習に行ったり、いろんなことしているわけですね。それでもっていろんなこと考えるっていうことだと思うんですよ。僕、それは非常にいいことだと思うんですね。だから、そういう学校が県内に1つぐらいあってもいいし、何か面白いんじゃないかと思うんですよ。だから、工業さんにこうだとか、江津高校でこういうつくってくれとか、斬新的なこういうつくってくれとかっていうのはまだ先での話もまた機会があると思うんで、今日は、大体のアウトルックとしてはそういう概念的なことしか言いませんけども、ぜひその辺については皆さんのほうでもうちよっと分析をさせていただいて、どうなんかなというふうに思っただければと思います。やっぱり子ども視線が一番大事で、子どもが軸ですから、やっぱりわくわくするというような学科を1つぐらいつくってもいいだろうし、2つでもあってもいいだろう。そういうことをずっとこのところ考えています。

## ○会長

有間会長さん、ありがとうございました。

それでは、委員のほうから質問、3分ぐらいしかありませんがお願いします、いかがでしょうか。

御出身ということもあって、非常に強い、熱い思いと、それから母校を守りたいという思いもありながら、マーケティングの観点から見れば、やっぱり一定程度の仕方のない面もあるというふうにおっしゃりながら、ただ、それが今なのかということについて、もう

少し経過を見守ってほしいというようなお考えもあったかと思います。

## ○委員

江津高校の近くでずっと見てこられてというところでちょっとお話伺いたいの、結局この問題って統合するとか残すとかって、いずれにしても、結局もう島根自体に子どもがどんだん減っている話なので、根本的な解決にはならないのかなというふうには思っていて、そうなったときに、やっぱりもっと県外から島根で学ぶっていう子をもっともっと呼び寄せてもいいんじゃないかっていう考え方もあると思っていて、割と島根はそういう積極的にやられていると思うんですけども、江津高校にも多分数名県外から来られている子もいると思うんですけども、その方々の、高校生の様子みたいなどころなんかも、もし御存じだったら教えていただけたらなと思います。

## ○有間氏

今年の3月に、1人は仲よくして、1年生のときからよく知っている子が大阪の豊中から水球部で来ましてね、僕の自宅の家の前を、夜7時頃になると、江津工業高校の寮にいますから、帰るんですね。その子なんかは何で来たんだよっていうと、水球やりたかったのもあるけど、ここら辺はすごく住みやすくて、いいよねって。もっと友達増やしてくれよって僕が言うと、でもさ、やっぱり、じいちゃんだって東京にいたんだろと、何で五十何年もいたんだよって、刺激があるからいいんだろって言われてね。刺激もあるけど、10人いれば、5人か6人は刺激があるほうがいっていう人もいるだろうし、その子みたいに、何か自分の目的がある、水球をやりたい、プラスアルファ、何か田舎に取りあえず住みたかったと。でもその子はしっかりしていて、ちゃんと卒業は地元の大阪の大学行きました。だから、それはそれで僕はいいと思うんですね。しっかりとここで養ったものを、現地に帰ってそこでまたいろんなことやっていければ。

例えば、県立大学卒業した子なんかは、浜田とか江津で下宿していたんですけど、就職はたまたま、なかなか自分の思うところがなくて、今、神戸で就職していますけどね、月2ぐらいで帰ってくるんですね。それはどういうことかという、波子の海岸がいいとかね、やっぱり気に入っているわけですよ。なんで、こちらに住んでみて、そのよさの価値を見いだす子っていうのは、やっぱりそれなりのことがあると思うんで、やっぱりなかなか離れなくて、どうするのったら、10年以内には帰ってくるよってというようなこと言ってくれていますからね。

全国では、そのものは同じなんだろうけども、いいところっていうのは、島根はたく

さんあるわけだから、それはいろんなチャンスを与えることによって、その中の何人かが認知をしてくれればいいというふうに、あんまり強制しないでね、枠を。僕はそういうふうに考えていますね。

#### ○会長

ありがとうございました。

#### ○委員

私、孫が今中学3年なんですけども、高校は隠岐を離れて本土のほうのある学校に行きたいということで、それで、おばあちゃんとすれば、できれば残ってほしいけども、その子がそう言うならば仕方がない。私の友達でも、お孫さんを持つ世代なので、だから、地域活性化にはすごくみんな貢献していて、いろんなことして、みんなで。あんた、お孫さん帰さしちゃいな、子ども帰さしちゃいな言うんですけど。江津のほうは、そういう声はあまりないですか。保護者の声、私たち世代じゃなくて保護者の声は。

#### ○有間氏

いや、僕、ほかの保護者とそういう話ししますけど、あんまり回答なくて。私、実は今、まさしく中学3年生の孫が東京にいましてね。下が中学1年生、あとは高校生、孫遠くにいるんですけど、みんな。実は今、中学3年生の男の子に、僕、2か月に1回ぐらい東京便乗ったりしますのであれなんですけど、島根と一緒に来いよって言うんですね。だけど、じいちゃんさあ、やっぱり遊ぶとことか何とか、面白いところあるんだけど、一番のあれはやっぱり知り合いがなくて、友達がいないから、それも時間かかるじゃないですか、なのでやっぱり帰りづらいわねと。でも、島根は魅力だよって言うことは言ってくれるんですね。じゃあ、私の子どもたちにそういうのならないかっていうと、なかなかやっぱり本音としては、向こうのほうやっぱり刺激があるし、魅力があるんでしょうね。だから、そういう意味では、こちらの本当によさって言うのは、私の子どもなんかは知りませんよね。スポット的に年に1回とか2回帰るわけですから、そりゃやっぱりなかなか地に足がついてないっていうか、よさを発掘するためには。というふうに思うんで、そこはあんまり僕は無理強いをしないでね、自然体で来る人たちが来て、よさをちゃんと受皿側が渡して、ちゃんと認知して帰ってもらうようなことを受皿を準備されていれば、僕いいんじゃないかなと思ってはいますけどね。

#### ○会長

ありがとうございました。アドバイスまでいただきました。

そうしましたら、次は江津工業高等学校の卒業生会、江工会とおっしゃるそうですが、その会長をされております土井正人様にお願いをいたします。

## ○土井氏

この審議会の皆さんのメンバー、女性が半分、男性が半分、この構成見てびっくりして、いいなと。こういう構成の中での会議っていうのは初めてですね。ただ、一つ気になるのは、江津市の地元の企業の方の委員の方がおられない。今回は江津工業高校と江津高校との、どういうんですか、実業高校とそういうことですから、やはり江津市における企業の関係者の、民間の関係者の方がこのメンバーの中におられたらいいなという感想を持っております。

それともう一つ言わせてもらおうと、やはり若い方の御意見をお伺いされるような、この意見をあれされたらよかったのかなという思いを持っております。今、そういう感想を持ちながらですね。

江津工業高校の卒業生の会の会長ということで、少し江津工業高校のことについても御紹介したいと思うんですが、先ほど田中教育長からお話がありましたように、来年度で90周年を迎えるわけですけど、多いときには900人以上の生徒がおった時期がありますが、現在は134名かな、非常にもう本当少なくなっている状態でございます。卒業生は1万3,000人ばかりで、石見地方に約6,000人ぐらい、約半分が石見、島根県内に約半数ぐらいが住んでおります。その中で江津市には2,500から3,000人近い、けどもう高齢の方は亡くなられとりますが、実質的には現存されている方は江津市内でおよそ2,000人ぐらいかなと、2万3,000人のうちの2,000人ぐらい。ですから、10人に1人ぐらいの割合で江津工業の卒業生かなという状況でございます。

現在の就職の状況ですけれど、今年はびっくり、県外企業は百数社、県内企業が三百数社、卒業生、就職希望者が40名ぐらいですね。ということは、県内の就職希望しとる子は30名ぐらいですので、約10倍、県外に至りましたら100倍の求人倍率というような状況が現在の江津工業が置かれている状況でございます。そういう状況の中で、生徒が本当に少なくなっているんで、この県立高校の在り方ということに対しての、これは既に石見地区の高校の再編問題については十数年前からいろいろ議論にのっているとかで、ここにもいろいろ書かれております。最初は、浜田地区を含めたところですが、それがこのたびは江津の人口の減少率をとということで、こうして江津地区を中心にしたこういう再編の問題が出てきた。私からすると、ちょっと遅いんじゃないかなという感覚すら持ってい

ます。もう四、五年早かったら、もう少し違った手が打てたのかなという思いも持っているわけですが、既にこういう状態になって、江津工業の立場からしますと、この再編はやっぱり歓迎する立場にあります。なぜかという、既に学校の生徒は本当、普通高校の立場からすると、先ほど有間さん言われたように、普通高校は人数増えているんですが、江津工業ほとんど50人ぐらい、80人募集の中の50人前後ぐらいがこここのところずっと数年続いております。ですから、それで県内とか、就職率は、先ほど話があったんですが、去年はちょっと低かったんですが、それまでは大体70%、今年については80%ぐらいが。パーセンテージはいいんですけど、実質人数で言えば20人だとかいうような数字になっちゃうんですね。ですから、そういう状況の中でこの統合という話が出てきたとき、これを考えたときには、江津工業にとってはやはりいいニュースだというふうに受け取っております。ただ、じゃあ江津市、あるいは石見地方、ここに、ほとんどそれ網羅して書かれているので、私はこのことについて、非常に賛同している、そうだな、しかりだなという思いを持ってこれ読ませてもらっているんですけど。

やはり、じゃあ江津地区、石見地区にとってどういう学校を、あるべきなかということ、を非常に考える時期というか、もうそういうふうな思いを持っておるわけですが、まず、今の石見地区においての立場とすれば、やはり江津工業高校、名称はどうでもいいと思っているんですけど、実業家、産業人材を育成する立場っていう軸は変えるべきではないと思っているんです。石見地区において産業人材。今話にもありました、先ほど田中教育長が言われた江津における工業団地への進出企業だとか、いろいろあります。そうした中では、やはり人材を求めとられます。江津地区のそういう人材、若い人材を求めて来られとるわけですので、まず、軸は、やはり産業人材を育てるという軸足を変えてはいけないと思っています。では、そこに普通高校、今の普通科で学ぶ子どもたちを、どういう形で一緒になって統合して進めていく新しい学校をつくっていくのかということで、なかなか具体的な案は出ないんですけど、思いは女生徒が、普通校では、今、江津高校、多分女生徒が結構多いと思うんです、男子生徒に比べて。そうすると、女生徒の行き場がなくなるということ、を危惧しています。新しい学校で女生徒が少なくなってしまうと、江津の女の子が浜田へ行くとか、私立の学校へ行ってしまおうとかなってしまうのでは、やはり、これはちょっと間違っているんじゃないかと。そうすると、やっぱり女子が入ってきて学べる学校をつくっていかなければいけないというふうに思っています。

そのためには、具体的になってくるんですけど、やはり、江津工業の施設は古過ぎます。

女生徒が入ってこられるような施設ではありません、残念ながら。トイレはない、更衣室はない、こんなところで女生徒たくさん入ってきてくださいなんてとんでもない話です。だから、まず、そこら辺りをきちっとしてほしいです、すべきですし、先ほどもちょっと話が出た、島留学とかいう県外からの留学生なんか、そういうところに求めるならば、女生徒を入れてくれる女子寮も必要であろうと思っています。

そういうふうにして、やっぱり門戸を広げて、女生徒が堂々と、今の江津工業ですけど、名称は早く変えていいと思っています。江津工業高校、工業高校っていうのは時代遅れだと思う。江津工業の卒業生の会長ですからね、ちょっと言い過ぎかも知れませんが、でも、ちょっと時代遅れだと思っています。だから、違う何かいい、女生徒が入ってきて、ああと思えるような誇りが持てるような学校名称っていうのは、いいかな、必要だなと思っています、具体的に思い浮かびませんが。そういう意味での学校を、女性、男性半々ぐらいになるような学校を目指して、その軸足は、やはりあくまでも産業人材を育てる学校であろうというふうに思っています。当然、進学を目指す子は、そういうふうにしていかなければいけないだろうというふうな思いを持って、まだ具体的なものがイメージとして浮かんでこないんですが、そんな思いで、今、ここにおらさせていただいて、意見を述べさせていただいたということで。ここら辺りで終わらせていただきます。

## ○会長

ありがとうございました。

江津工業高等学校の卒業生会の会長さんとしての御意見というふうに承りました。

皆さんのほうから御質問をお願いいたします。

## ○委員

産業人材を育成するというお話と、あと、工業高校は時代遅れじゃないかと内心想うという話というのが、何ていうのか、ちょっと相反するような感じのようにも聞こえながら、でも、すごい納得できる場所があって、私、仕事柄全国のいろんな工業高校なんかもお邪魔していて、やっぱり工業高校のこれまでの役割ってものは、決められたものを決められた手順で正しく作っていくというのが、多分、これまで工業高校で育成してきたものなのかなと思いつつ、でも、今求められているものは、新しいものを、持っているスキルを使って新たに生み出していくみたいなの、何かそんなことが求められているのかなというふうにも思いつつ、そう見ると、確かに今の工業高校って、このままでいいんだろうかと思うところもすごくあるんです。



土井さんが思われる産業人材の育成というのは、何か具体的に、これからどういう力を育成していくことが大事だと思われるのかなってというのが、ちょっとお伺いしたかったんですね。

#### ○土井氏

産業人材を育成するのに、私の考えとすれば、3年間では不足していると思うんですよね。だから、それをさらにもう一つ上に伸ばしていく必要があると思うんです。そのためには、やっぱり石見部だったら、今言われたポリテクカレッジだとか、あるいは浜田に県立大学も通える範囲内である、まあ、あそこは学科が産業人材じゃないですので、ちょっと問題があるかも分かりませんが。いずれにしても、そういうところで学ぶ機会をもう一段上にしてから社会に出て、直接社会で、企業で働ける人材に育てる基礎をつくるどころだ、もちろんそこで直接企業のほうへ行っても、そりゃもちろん問題はないわけですが、やはり、もう一步先に進めていくための産業人材の基礎づくりの学校でありたいなというのが思いです。

#### ○会長

ありがとうございました。

#### ○委員

企業の方がここにいらっしゃって声が聞けるといいなと言われたのは、本当に地域をつくっていくメンバーとして、すごく大事な考え方だなと思ったんですけども。もしいらっしゃるとしたら、どういう声が聞かれたと、土井さんの観点から思われるかどうか、企業のほうからどういうニーズがあるのかなと思っておられるかということと、これまで工業高校と企業との連携で、どういう取組が既にあるかっていうことを教えていただけるとありがたいです。

#### ○土井氏

最近私もびっくりしたんです。先ほど言いましたように、私も江津工業高校に長いことおったんですが、あれももう20年ほど前の話ですので、すごく変わっているんです。企業が直接学校へどんどん乗り込んできている。だから、企業説明会を学校で全校生徒集めてやって、少ないですからね、百何人、200人ぐらいの生徒がおる中で、企業が市内の企業から20社ぐらいが来て、生徒と1対1で、こうしてプレゼンやったりとか、企業訪問したり、企業が直接今は学校のほうへ出向いてきている状況です。これはちょっと最近驚いて見ているんですけど。だから、今まで子どもたちは、学校から外へ出ることはあん

まりなかったんですが、今は企業が学校へ入ってきてくれますし、子どもたちもそういう意味で企業のほうへ出ていったり、いろいろしているので、社会とのつながり、コミュニケーションが非常にできている状態が今の現状なんです。なかなかそれが、どういうんですか、入学の生徒のそれにつながらないという状況、見えてないからだと思うんです、皆さんが。だから、今は本当企業の方が積極的に学校のほうへ入ってきている、つながりが非常に強くなってきている状況です。

#### ○会長

質問としては、それでよろしかったですか。

#### ○委員

ありがとうございます。もう既に企業のほうからこちらに来ておられるってということで、特段企業からの願いは、企業が生徒たちにアピールするものとして、何か、どういう期待を持って学校に来ておられると思いますか。

#### ○土井氏

具体的に私、ちょっとそれは分からないですが、例えば学校で、工業高校ですから何か物を作ったり材料が要ったりするときに、企業が提供してくれるとか、その材料を、いうようなことは実際あるようです。だから、先ほど言いましたように企業のほうで求めるのは、いろんな企業があるので分からないですが、この前も、ある企業の社長さんと1時間ばかりいろいろ話ししたら、やはり、今さっきも言いましたように、もう一つ上の段階で勉強してきてほしいなっていうのが、企業の社長さん方の話でしたね。

#### ○会長

ありがとうございました。

先ほど土井会長さんから御意見あったときに、企業関係者が入っていたらっていうお話しいただいたときに、私もちらっとそう思ったんですけど、実はこの審議会、総合教育審議会なので、江津の話題だけを扱う審議会ではないメンバー構成なので、そういう意味でそういうふうにはなってはおりませんということを、言い訳としては申し上げないといけないかなというふうに思いました。

それから、この後、教育委員会のほうで江津の商工会議所や商工会から意見をいただいて、それを取りまとめた資料が出てまいりますので、その中でまた検討させていただければなというふうに思います。

ほかの委員さん、何か御質問ございませんでしょうか。

工業という名前は捨ててもいいという御発言は、なかなか斬新だったなど。実は大学も、昨日ちょっと聞いたんですけど、工学部という看板上げたままだと女性が入ってこないということで、工学部という看板を下げ始めているという話を昨日ちらっと聞きました。京都大学が何かそうだったという話でしたね。

## ○会長

ほかに委員のほうから御質問ありませんでしょうか。

ありがとうございました。

そうしましたら、続きまして、GO GOTSUコンソーシアムっていうんですかね、江津高校と江津工業と、それから、清和養護学校ですね、その3つの学校から成る江津地区のコンソーシアムのマネジャーをしておられます藤田貴子様のほうから御意見をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

## ○藤田氏

江津のほうは、まちづくりからスタートしまして、私のほうも理事では携わってはいましたが、現場に入ったのが、2020年の、ちょうど江津工業高校にコーディネーターが配置された年でした。本当に魅力化が始まってまだ丸3年しかたっていないという状況です。それと同時にコロナがスタートして、本当に何も身動きが取れづらい3年間ではあったんですけども、江津高校におきましては、先ほど教育長のほうが発表されましたが、いろいろな取組をしまして、探究活動の組立て、それを地域といかに連携させていくかっていう仕組みづくり、そして、それ以外にも町と協力しながら古民家学生イベントつぬさんぽというような形で、探究授業の実践の場、そして、その実践の場では大学生にも大きく関わっていただきまして、昨年は36名の大学生と一緒に地域のイベントづくりというものをさせていただきました。また、そのイベントの中では、63名の卒業生とも共につくり上げながら、実際には82名の高校生、江津高校180名の学校ですけども、82名の高校生、総勢、一般の地域の方集めまして約250名の方々と地域づくり、学校づくりというところをさせていただいております。今年度は、小・中学生も巻き込んだ中で、1回のイベント150名の学生と共につくり上げるっていうのを、この3年間で積み重ねてきました。そういった部分で、中身が随分出来上がった江津高校の探究授業の情報発信は今年度から力を入れてやり始めまして、今年度、その成果もありまして、生徒数のほうは増えております。定員充足率も増えております。また、市外からやってくる学生っていうのも増えております。そういった中で、有間会長も言われましたけども、江津高校としては、

この魅力化の取組ってというのは、進んでいるのではないかなというふうに思っております。

工業高校のほうなんですけども、工業高校は、このコーディネーターが入る前から、実は地域との連携というのはしっかりしておりまして、本当にどの学科も地域に出て、いろいろなものを一緒に地域の方と、また、企業の方とつくる体制ってというのはできております。私もいろいろなコーディネーター研修で他校の取組聞いておりますけども、江津工業の取組は、県内の中でもすごくトップクラスなのではないかなというふうに思っております。ただ、土井会長が言われるように、入学者数ってというのは、やっぱり大変厳しいものになっています。そういった意味で、私がコンソーシアムマネジャーの立場として感じているのは、日本全体の物づくり人材っていう人口がやっぱり減っているというところを加味したときに、本当に工業においては、魅力化だけで増えていくものではなくて、本当に小中との連携がいかに必要なのかっていうところがとても重要だかっていうふうに思っております。また、江津工業の学校関係者のほうからも、やはり、今の松江工業、出雲工業のほうは、就職率よりも進学率が大変高くなっている。なんですけども、まだまだ江津工業は、進学率というところではまだ低い状態になっています。ただ、今、この江津工業の規模であると、やっぱり進学に対しての先生のサポートの部分の負担感であったりとか、普通教科の部分の充実ってというのは大変難しいと言われております。

そういった意味で、私は、どちらかというところ統廃合に関して、統廃合というよりも新設校に対して、町としても今きちんと見直す必要があるのではないかなというふうに思っております。というのも、今の学校の在り方というのは、人口が増加した形で考えられた仕組みから、そこが今人口減少になって、文科省からも探究の在り方、単なる、正解を出すだけではなくて、本当に課題を考え、答えのない答えをきちんと導き出す人材をどう生み出していかってという形で、教育改革のほうが進んでいるかと思えます。そういった中で、やっぱり高校の在り方も、今の高校を単なるひっつけた考え方ではなくて、やっぱり今後の10年後の社会の在り方にふさわしい高校の在り方というのがどういったものなのかっていうのを考えていって議論していく必要があるのではないかなというふうに思っております。

最近、企業のほうに訪問しまして、いろいろお話のほうを伺っている中で、企業が求めている人材の部分で、どういったところを見ながら採用をされますかというような質問で、ほとんどの企業が、自分の考えと自分の思いを、下手なりでもいいのできちんと口に出せる子たちをやっぱり採用したい。そして、困難なことがあってもチャレンジできる柔軟性

を持った人材を採用したいというふうに言われております。そういった意味で、本当に学校の教育での、要は進路指導の部分で面接指導とかあるんですけど、その面接指導のところは、企業としてはあまり参考にしてないらしいんですね。それよりも、その後の部分での質問で、相手の素の質問が出たときにどんな答えができるかっていうところを重要視している。それは工業系の企業でもそのように言われておまして、やはり、問題解決しながらプロジェクトを進めていったり、また、建設業でも、現場監督、100名単位、万単位のマネジメントができる人材っていうのを企業のほうでは求めておられます。そういった部分で、本当の意味でも、先ほど言いました産業人材をどのように唱えるのかっていうところはとても重要だなというふうに思いますし、そこを意識した授業というのは、工業高校のほうでもすごく行われているのではないかなというふうに思っております。

そういった中で、やっぱり今後の高校の在り方というところで、新設校としての考え方、また、会長が言われましたように、今回、江津での問題ですけども、この10年で必ずほかの地域でも、この同じような問題は討議されていくことになってくるんじゃないかなというふうに思っております。なので、今回まず江津がスタートをしていく、この新しい、島根県の中でも新しい学校の在り方、県立高校の在り方を考えるチャンスなのではないかなというふうに思っておりますので、また、土井会長が言われましたように、やはり、新しい新設校を考えると、ぜひ企業、そして、大学、関係者のほうもしっかり入れながら、どんな人材を社会に輩出していくのかっていうところにおいて、どんな在り方が必要なのかっていうところを考える必要があるのではないかなというふうに思っております。なので、今年度、コンソーシアムの中では、市役所の教育委員会だけではなく、定住、商工、政策企画が入った庁内コンソーシアムというものを立ち上げまして、そこで教育の在り方というものを考え始めたところです。県の中でも、そういった形で、教育委員会だけではなく、地方創生の立場から高校の在り方をどのようにしていくのかという討議のほうをしていただけたらなというふうに思っております。

あと、この10年というのは、そういった部分で、新しい社会になるための学校の在り方と考える大切な10年だと思っております。なので、新しい考え方のできる管理職を江津には配置していただけたらなというふうに思っております。どんどん変化をさせていかないといけないときに、やっぱりどうしても変化っていうのは難しい。調整っていうところが得意な方もおられますし、そういったところでの人員配置のほうも考えていただけたらというふうに思っております。設備のことも土井会長言われましたけども、私もそのよ

うに思っています、単なる2つの高校がひっついただけではなく、新しい学校の在り方を考えた上で、どんな設備が必要なのかという在り方を考えていただけたらなというふうに思っております。新しい学校として、江津という地域にどんな魅力をつくれるかというような学校の在り方、そして、その施設というところをしっかりと考えていくことによって、地方創生の1つとなるのではないかなと思っています。

江津高校の今企業さんで言われているのは、やっぱり企業の中でも、江津工業の人材だけで工業系の部分を人員確保していくのは大変難しいという形で言われておりました。そのために企業に入ってから教育システムというのも、すごく会社のほうがしっかりと投資しながら、お金出しながら教育をしていくってところもあります。なので、普通科高校からの生徒もどんどん募集していくというような傾向は、今企業の中でも始まっております。そういった意味でも、その部分の接続が上手にできるようにやっていくこと。そして、企業側が求められているコミュニケーションであったりとか、問題解決であったりとか、自分の意見が本当に言えるための高校の在り方ってどういったものなんだろうかっていうところ、一緒に考えていけたらなというふうに思っております。

コンソーシアムを進めていく中で、県のコンソーシアムという形で、県のほうにもお金のほうを頂きながら運営のほうをしておりますが、今まで県の方々と一緒に何かを組み立てたっていうのはあまりないです。なので、こういった時期でもありますので、県の教育委員会をはじめ、いろんな方々と、江津市と一緒にどういうふうにしていくのかっていう形を考えていく必要があるのではないかなというふうに、地域側からは感じております。

## ○会長

ありがとうございました。

両方の高校をとということよりも、もし新しくつくるとしたらという観点から、教育環境の充実につながるよということであり、一方では、先ほどちょっと〇〇委員さんから質問があったことと重なってくるんですけども、今後どういった人材の育成が求められるのかっていうことをしっかり10年後も見据えた上で設計をする必要があるということ御意見いただきました。自分の考えや思いを表現できるとか、チャレンジ精神とか柔軟さとか、問題解決力とかマネジメント力とかコミュニケーション力っていうのは、別に工業や普通科に限らず、大学教育にも求められているものでございまして、そういう意味で、新しい高校のイメージをきちんと持つよという御意見をいただいたというふうに思っ

おります。ありがとうございました。

それでは、皆さんのほうから御質問をお願いいたします。

## ○委員

私、前回のこの会議の場で、この江津の中学生の進路が、私立高校だったり、浜田高校にかなり流れているような資料を見させてもらって、江津高校の魅力化コーディネーター配置しているのに、どういったことをしているんですかという質問をしたのを今思い出したんですけど、藤田さんの説明を聞いて、すごく感服したというか、私、隠岐なので隠岐高校が普通科であるんですけど、ぜひ参考にしたいというようなことがたくさん出てきましたので、かなり将来に向かって明るい材料があるなというふうに説明を聞かせていただきました。

有間さんの説明の中で、島根県の教育委員会が推計数値を出したけど、これがどういった根拠があるのかということで不信感を持っているような説明があったんですけど、今の藤田さんの説明を聞くと、魅力化がどんどん熟して行って、江津の中学生が今までと、進路を江津高校のほうに求めていくというようなイメージを持って今進められているというふうに思っているのかどうか、少しお話を聞かせてください。

## ○藤田氏

本当にまだ偏差値というところでは、江津高校はまだまだなところもあります。ただ、そうじゃないところで、地域との連携、コミュニケーション、そして、相手と本当に協働しながらどう組み立てていくのかというところ、また、自分事として物事を考えるっていう意味では、江津高校は、ほかの学校に負けてないぐらい、今中身は充実してきているのではないかなというふうに思っております。

そういった意味で、徐々に江津高校に意識を向けている保護者さんであったりとか、生徒さんが増えてきているというお声のほうも聞いてはいます。なんですけども、それとともに、やっぱり今後どういった学校が本当に江津にとって必要なのかというところで、江津高校、私も新聞取材の中で答えさせてはいただいたんですけど、このままいけば二、三年で定員はオーバーするぐらい持っている自信を持ちながら活動のほうはしております。ただ、それでは工業の部分考えたときに、工業は魅力化だけではなかなか難しい部分といったときに、やっぱりこの地域にとってどんな高校の在り方というのが必要なのか。また、学校というのは、私は入ってみて、やっぱりすごく難しい部分も大変である部分と、今の社会とのギャップというのも大変感じる部分があります。やっぱり既存のものを変え

ていくというのはすごく難しいとは思ってはいますが、新しくなるということをきっかけに、新しいものをつくるという視点で取り組んだときに、どんな学校が出来上がるのかな、それが江津に、島根県の中でも江津にある高校らしいものが、どのように出来上がるのかなってというのは思っております。

## ○有間氏

民間企業で言えば企業努力していると思うんですよ。特に藤田さんのパートのところ含めて、具体的に。ですから、今の学校のスタッフ、校長先生以下、スタッフさんも前任、前任、その前の人たちがやってないとは言いませんけど、今江津市内だけじゃなくて、取り巻く学校、いわゆる浜田だとか郡部だとか含めて、中学校とか、やっぱり江津高校の説明会だとか歩かれているんです。それどこもやられていると思うんですけど。プラスアルファ、やっぱりいろんな意味で民間で企業努力はやってますよね。そういうことなんで、何ていうんですか、実績が出ていると思うんですよ。

最終的に僕が提案したかったのは、さっきのモデルとかと言いましたよね、島根モデルとか。そのほかに、さっき藤田さんとか土井さんも言っていましたけど、これ、やっぱり今回チャンスだと思うんですね。江津地区っていうエリアの狭いところなんだけどもってということで、教育長以下皆さんおっしゃっています。皆、よく言葉で産学協同体とかって、一緒にというんですけど、せつかく江津地区にはポリテクというのがある、工業高校もある、江津高校もある、私立もある、それから、県立大学の浜田キャンパスができたということになって、学校の受皿だけじゃなくて、世の中に出したときのっていうのはあるじゃないですか。だから、まさしく産学一体で、この狭いキャパシティのエリアの中でどういことができるか、それを具体的にいろいろ検討されて、トライアルやられてもいいと思うんですよ。だから、新しい学校をつくって、その中でこうだという。そうすると、場合によっては中高一貫、小中高一貫島根モデルとかっていうのもできるかもしれないし、テーマの中で。いろんなことができると思うんですよ。

だから、そういう意味で、きちっと教育とか高レベルも含めていろんなことができる。だから、工業専門高校から工業系のさらなる高等教育に行きたい方というのがまだ江津工業で十分じゃなかったらば、そういうところも含めた学科をつくるか、情報科だけじゃなくて。それから、江津高校なんかも普通課程ですけどもね。だから、僕、大学の単位制でもいいと思うんですよ。入っておいて取りあえずこれもやりたいて、こういう単位で卒業できるよと、だけど、もしかしたらこっち行くかもしれんし。だから、いろんなことを



やって、例えば入学した子なんかは、僕が知っている限りでは、最初話をすると、理容師さんになりたいとか美容師さんになりたいとか保育士になりたいっていうのが、そのうち変わってきて、学校の先生になりたい、そのうちこうなりたいたいっていうふうに変わってくるんですね。もちろんそれは変わってくると思いますよ、環境によってとかいろんなこと。だから、そういう意味で、受皿をもうちょっと幅広くしてハイスペックでね。高校だけっていうんじゃなくて中高一貫だとか、地区ごとにとかということでも。

願いは、もう一つ。中山間部っていう言葉はよく全国で使っています、島根もね。江津地区なんかは中山間部という扱いになってないです、沿線で、中山間じゃないですから。でも、一緒なんですよ。交通の便は悪い、そういうこともハンディキャップあるんですね。ですから、そこは一律、もう島根、鳥取なんていうのは、もう言い方悪いですけど、差別化をされているわけです、ある面では。だから、それなりのことも土台として考えて、どうしようかっていうことなんかも含んで考えていただきたいなと思っています。

## ○会長

ありがとうございました。

今おっしゃったことは、あれですよ、大学なんかでも学部、学科を選んで入学するというのは、もうやめたらっていう話になりかかって、いわゆるレイトスペシャリゼーションという話の中で、少し今そういう動きが出てきているなというふうに思います。だから、大学生ですらそうなので、高校生のときの、例えば工業の何科に入りました、それが一生勤められるとは限らない時代ということになったので、そういう意味でさっき藤田さんが御提案いただいたような、そういう例えば新しい発想で物をつくる能力とか、そういうジェネラルな力をどう育てるかということに、だんだん変わっていくんだらうなというふうには思われます。ここで高校3年間で学んだ技術で一生食っていける時代じゃないってことはみんな分かっているわけだから、その辺をどうするかですよ。

## ○委員

公立の高校ですよ、江津の公立高校の考え方をここで今しているわけなんですけども、公立でも国立の附属のような今高校の話のことじゃなくて、本当に県立高校の話ですよ。今の話は結局、県教委さんが持っていますよね、母体ですよ。私は、逆に言ったら本当に今このままだったら、もしかしたら、どっちの高校がどうこうではなくて、今のままじゃどっちかの高校、あるいはこれから今後の子どもたちの育ちゆく、そういった教育が成り立たない現状にあるから、だったら、県のほうが1つにして、魅力ある学校を新設っ

て言われましたけど、そこもちょっとあると思うんですけど、それを新しくつくっていかうじゃないかと言ってくださっていると。それに江津市の民間の方がすごく参入して、それは私はちょっと、はてなと思うんですけど、どんなものでしょうかね。

#### ○藤田氏

新設校のイメージという形でここに書かせていただいたんですけども、新設校といえども、結局ひつついた形みたいな形を、新設校というのを、島根県の今後の高校の在り方、今後の島根県の地方創生の在り方から考えた高校というのはどういうものなのかって。それが県統一ではないと思います。県立高校イコール県統一ではないと思っていて、地方創生の在り方というのは、個々の地域の個性をやっぴり発揮しながら、そこで循環型の社会をつくっていくというのが地方創生の在り方だと思っているときに、県だけで考える高校の在り方ではなく、小中からつながってくる、やっぱり市の考え方も一緒に、そして、その出口でもあります企業、大学とも一緒に考えるのが新しい県立高校の考え方なのではないかなというふうに思っております。そのために、やはり、幼保の部分は、ほとんどが民間の企業様が経営のほうをされている中で、幼保の経営者のほうにお話を伺ったときに、本当に今、企業で求められているような保育の仕方にどんどん変わってきているんですよ。本当に自分たちで話し合うとか問題解決する、一定のリズムで一定の成長度合いで測るのではなく、その子その子に合った成長をどう伸ばしていくのかっていうところを、幼保ではきちんと組み立てているんだけど、義務教育に入ると、どうしても一律的な仕組みの中になって、ここまでが市だけでも、ここから先は江津市にありながら県のことでしょう、なので、市の中でも高校は県が考えることでしょうみたいな形を言うんですけど、町から考えると、そこは一緒に考えるべきかなというのはシンプルに思っているというところになります。

#### ○委員

要望とか意見とか、地域住民の声を届けるというのはすごく大事かもしれないですけど、その前に、本当の保護者の方とか、通っている生徒さんの思いとか、これからそこで生きていく子どもたちのそういった意見も吸い上げながらですよ。

#### ○藤田氏

部活動を通じてですけども、生徒たちとも関わり合いながら、生徒が探究活動で外に出ていく前に、それ以前にコミュニケーション、誰か知らない人と話すってところにハードルがあるんですよ。なので、それ以前の問題で悩んでいる子どもたちに、どんな機会を与

えながら、本当に地域の中に飛び込んでいく準備ができて、飛び込んだときに自分事と考えられる課題に直面できるか、それを自分で考えて解決できる、この解決が少しでもできたという達成感を、この地域で味わわせてあげられるか。そうすると、これは可能性のない地域ではなくて、高校のときに何かできたという、自己実現ができたという経験を積むことが一番の、私はUターンにつながってくるなというふうに思っているの、そういった意味でも地域や学校、そして、大学、企業と一緒に学校づくりというものを進めていくべきだなというふうに思っています。そういう意味で、江津市のほうはコミュニティ・スクールというところでスタートしていますが、その、今、コンソーシアムがもう既に始まっていますので、高校からそのコミュニティ・スクールの在り方というところを、本当に考えるチャンスなのではないかなというふうに思っております。

### ○委員

今、いろんな意見を皆様方、聞かせていただいたんですけど、藤田さん学校にも実際入られてということなので、ちょっとPTAの立場といいますか、保護者の立場でということ。先日子ども家庭庁の方にちょっとお話伺う機会がありまして、新設されましたよね、子ども家庭庁。その中で子どもの意見を聞くということが、これ、多分義務化じゃないですか、努力義務じゃなくて義務化ということでしたので、それは置いといたとして、実際今、高校に通われている生徒たちといろいろコミュニケーション取られとる中で、子どもたちってどんな感想を持っていたりとかというのは何か感じる所があれば、教えていただけたらなと思います。

### ○藤田氏

江津高校の生徒は、とにかく楽しいと言っています。なので、進学校ではない部分というのが若干ある、進学校ではあるんですけど、それはもう地域寄りによりなっている部分があるので、やっぱり少しいろんな意味で余裕はあります。なので、部活動も兼部したりとか、いろんなことが、試せる場であり、どちらかというとなんか、トップを狙う子たちが来ている学校ではないので、逆に協働しながらやっていこうっていうのがすごく強い学校かなというところで、そういった意味でも、やっぱり中学のときには学校には通えなかったけど、高校でまたいろんな部分で花開いたっていう子は実際にも見えていますし、その子が体育祭の分団長になったりして、みんなの前でリーダーシップ取っている姿を見ると、やっぱりすごくうれしいなというふうに思っています。

工業高校のほうは、すごくコミュニケーション力が高いなというふうに思っています。

それは地域の方と一緒にしながら、また、課題研究を進める中でやっていく中で、やっぱりそういった能力が高いのではないかなというふうに思うんですけども、一緒にイベントをしたときに、やっぱり率先して動くのは工業高校の生徒だなというふうに思っております。そういった意味でも、本当に満足度と、本当に魅力化データとか、いろいろなデータからも見えることはあると思うんですけども、生徒たちの満足度は、とても高いものになっているんじゃないかなというふうには現場では感じております。

## ○会長

ありがとうございました。

藤田マネジャーからの質疑というつもりなのか、もう全体のディスカッション、私の仕切りが甘いところなるなというふうに反省しながら聞いているんですけども。一応これで4人の方々から御発表いただき、その個別に対する質疑をいただいたと。それから、時間の関係もあるんですけど、この中で一緒にお話ししたこともあるので、全体のやり取りについても、一応一通り終わらせていただいたという形にさせていただきたいというふうに思っております。

最後になりますけど、この4人がおられる場で、少しお尋ねしておきたいとか、少し御意見を伺いたいということが追加でありましたら、手短にお願いしたいんですけども。委員の方から。

## ○委員

質問ではないんですけども、やっぱり特に藤田さんのお話を聞いていて、何か私、再三この審議会でも申し上げているんですが、やっぱり島根の教育の強みって探究だなんて、改めて思いました。学校の形がどうなるにせよ、やっぱりこの江津地区というところで新たな探究モデルをつくっていくというのが、何か1つポイントになるんじゃないかなというふうに思っていて、先ほど有間さんも小中高一貫をつくったらいいんじゃないかみたいなお話がありましたけれども、僕自身もやっぱり小学校、中学校、高校と探究がつながっていかないっていうのが、割と全国的にも課題だし、多分島根県の課題でもある。一方で、冒頭の田中教育長のお話の中では、ふるさと教育というものを多分小学校、中学校でしっかりやっていて、一方で高校では、このコンソーシアムを中心に探究をやっていてっていうのが、ちゃんとやっているんだけど、それがもっともっと一貫したものになっていけば、小学校の頃に見た江津地区の風景、これで感じたことと高校になって感じたことって多分違ってくると思うんですけども、何かそういったものが一貫して子どもたちに何

か残るものがあれば、もっともっといいものができるんじゃないかなというふうに思ったので、やっぱりこの探究というものを軸にしながら江津地区がさらに発展していくというのがいいんじゃないかなというふうに、何かすごく感想としては思いました。

## ○会長

ありがとうございました。

それについて何か御意見ございますか。

## ○委員

私も、その探究のすごさというか、そのクオリティーをぜひ生かした新設校の作り方がいいなと思ってずっと伺っていたんですけども、補足資料の4のところ、統廃合したときのメリットというところで、普通校と工業高校が一緒になっているときに、いいものとして見えてくるのが、普通科にいるんだけど工業の内容が学べるというふうに、伺っていますか、私たちのこの社会の中のステレオタイプというか思い込みとして、普通科に行けるなら普通科、進んで工業に行くという子も一部いるんだけど、普通科に行けないのでというか、工業というものを、工業、商業とかという専門に近いものを二次的に見るというような、そういう課題があると思っていて、今、皆さん方に伺っていると、企業との連携というところで、もうすごく魅力のある活動を既にされているので、ここを使って、ある意味対等にといいですか、今一人の子どもが全ての力を身につけるというよりは、いろんなものが得意な子どもが集まって、みんなでいいものをつくっていくということをしていく時代というか、そういうスキルが必要だというふうに思っているんで、何かそういうものが、来られる保護者の方、子どもたちに見えるような名前の科をつくるのかというようなことができてもいいのかなと思う。

普通科、工業科ということではなくて、例えばさっきの探究の話でも、企業の方から本物の課題をもらって、今企業はこういうものに困っている、そういうものを高校にいる時代にとか、1年間で解決するというものではなくて、ずっと長期的に、こういうものは課題なんだよというものを生の課題を出してもらって、それについて子どもたちがそれぞれの科で学んだ魅力を持ち寄って一緒に何かをするだとかというような形で、普通科寄り、工業寄りということはあってもいいと思うんだけど、せっかく2つが繋がった新設校なので、それが融合されたことができて、さらに保護者の方の話を聞いていくと、やっぱりその先の進学ということを気にしておられるので、工業に行ったからといって大学進学しにくいというようなところを解決できる科だといいなと思っていて、例えば、物づくり

について学ぶだけでなく、それに付随した貿易だとか経済、マネジメントというものも理論として一緒に学んでいって、そういうものをもうちょっと学びたいなと思ったらそれを大学進学に生かしていく、それを企業と一緒に探究でプロジェクトをやっていくので、大学進学に関して投資するよというような企業が出てきたりだとか、何かそういうような形で、すごく魅力のある科だとか学校というものができていくんじゃないかなと思って、とてもわくわくして伺っていました。

#### ○藤田氏

私のほうも、本当に新設校というのをちょっと強調したところは、そのところがありまして、先日、工業高校のほうと県教委のほうで、普通科と工業高校が併設している県外高校への視察っていうのを行われた報告書のほうが、今朝、校長先生のほうから回ってきました。その中に、やっぱり難しさ、デメリットというのもすごくあるという形で書かれてはいるんですけど、それはやっぱり既存の学校をひっつけようとしたときに、いや、単位数が違うとか、こうなるとかああなるとかという形になっているので、やっぱりその議論を調整するのってすごく難しいだろうなと。新設校って新しい学校なんだというふうにしたほうが、逆にその調整のほうもスムーズに行われるのではないかなというところも踏まえて、〇〇委員が言われるような、本当に新しい学校づくりというところを意識していけると、やっぱり普通高校から工業科に興味を持つ生徒もいますし、そういったところがスムーズなカリキュラムの選択ができるような学科、学校になっていくといいなというふうに思っております。

#### ○会長

ありがとうございました。

#### ○土井氏

私、統合ということが頭の中にずっとあって、藤田さんが言われる新設校というイメージをなかなか描き切れなかったんです。そして資料を見ると、ここには新設校にイメージというのがあるんですね。ところが、その新設校のイメージの中身が全く新設校じゃないですね。既存のそれを羅列されとる。教育委員会、よろしいですかね、というような状況ですね。これ、やはり白紙にすべきだろうと思います、ここは。特に個別に言いますと、ロボット制御科なんて、江津工業、全然対応できていません。もちろん就職でロボット科の就職希望は全くありません。そういう状況が今江津工業であるですが、ここにはロボット制御科なんていうのがいまだに載っているという現状ですね。やはり、ここらは委

員会のほうでもしっかり議論をしていただいて、新しい新設校をつくるんだというイメージで、ぜひ話を進めていただきたいという切なお願いでございます。

## ○会長

ありがとうございました。

これは、本当に設置の話にもしなったら、教育課程の問題としては非常に複雑な問題があって、その卒業要件をどう満たしていくかというようなことで、非常に微妙な調整が必要になってくる。今日いただいた議論は、やっぱり江津市のそれぞれの高校が積み重ねてきた伝統とか、今地域が向かおうとしてせっかく結束していつている新しいチャレンジの方向性とか、そういうのを踏まえながら、この地域の、いわゆる小規模感をきちんと生かして、新しい試みをここから始めてみてはどうかというふうな御意見もいただいたので、そういうところを踏まえて、少し委員の中で議論を整理していきたいというふうに思っております。

最後になりますけれども、田中教育委員長さん、それから、有間会長様、土井会長様、それから、藤田マネジャー様、今日お忙しい中を押してこの審議会にお出かけいただいて、貴重な議論に加わっていただきましたこと、また、いただいた意見を尊重して、今後委員でディスカッションに取り組みたいということで、心から御礼を申し上げて終わりたいと思います。拍手をお願いいたします。（拍手）

ありがとうございました。

本日、これから延々続けようという気はございませんで、今日事務局のほうでもう一つ用意していただいた、産業界からの意見というのが1枚ありますので、それについて簡単に御説明いただいて、次回どう進めるかということについて、少し方向をお示しして終わりたいというふうに思っております。

事務局、お願いします。

## ○事務局

商工会議所・商工会からの意見・要望まとめというペーパーを、お手元にありますでしょうか。お願いします。

2番、主な御意見ということで、ポツが6つございます。2ポツ目と3ポツ目にありますのは、建築、土木系、情報系の人材が不足しているので、ぜひそういった人材輩出のカリキュラムをお願いしたいと。それから、5ポツ目、6ポツ目のところは、一人一人の適性に応じた学びや女子の受血的な学科が必要なのではないかというような御意見。4ポツ

目が一番大きなことだなというふうに受け止めているんですけど、地元を担う人材を育成し、地域外への若者の流出を防いでほしいというのが切なる思いだというふうに受け止めています。1つ目は、それぞれの学校の培ってきた学びを継承してほしいということでした。

裏面を御覧ください。統合につきましては、おおむね致し方ないというような受け止めの中で、子どものことを一番に、そして、魅力的な学校にしてほしいという思い。一部、統合には反対という卒業生の御意見もございました。その他のところ、やはり生徒主体に考えてほしいということと、小学生やその他、若い方の意見のほうも参考にしてほしいというような意見をいただいております。

別な紙で、地図の中に、中学校、高校を落とし込んだ江津市の学校配置を御覧ください。4つ市内に中学校ございますが、中学生が多い、在籍者が多いのは、江津中学校と青陵中学校になります。ともに60前後の人数。それから、江東中学校と桜江中学校というのが20人を切る形で、東側と南側にある学校になります。

前回審議会のほうで宿題として、市外に出ている中学校、つまり、この2校以外の高校を選んでいる生徒は、どういった動機に思って選んでいるのかというようなことを御質問いただいたと思います。一番最初に御覧いただいた基本的な方針案の裏面に、前回もつけておりました生徒数の表がございます。3番目に、市内中学校の卒業生のうちの進学者の内訳というところがございまして、2校以外、つまり私立高校及びその他地域のところ、浜田市内の県立、これにつきましては、やはり水産高校、商業高校よりも浜田高校が多いと。浜田高校への進学につきましては、早い段階から、もう医学とか薬学とかというような志を持っている生徒さんであったりとか、大きな学校で高い志を持ってチャレンジしようという卒業生が主に進学に向かっているということになります。

江津市内の私立高校につきましては、何度か先ほども話題にありましたけども、やはり、一番大きなのは通学支援だと、バスの存在の大きさ。それから、特殊な進学クラスを構えていること。さらには、強い部活動に引かれて行くというようなことを伺っております。それから、その他地域の県立高校、近くには邇摩高校だったり島根中央高校だったりございますけども、これは桜江町が旧邑智郡ということで、地盤のつながりっていうものもございまして、これも通学支援が川本町のほうで支援されている部分もあつたりするのが動機になっているのではないかと。また、邇摩高校につきましては、総合学科の特色ある学びに向かっている生徒がいるのではないかとというようなこと。それから、県外に向かう生



徒さん、それから、さらに遠方の高校に向かう生徒さんということにつきましては、部活動の強いサッカーであったりバレーであったり、自分の得意な部活動をよりよい環境で行いたい、または、農林とか体育とか専門的な学びを求めての進学という形で進学の動機になっているというふうに、複数の中学校関係者のほうから聞き取りを行って整理させていただきました。

以上、まとめて報告させていただきます。

## ○会長

ありがとうございました。

あまり長くは議論できないので、また、今日、お聞き及びかと思いますが、10月の審議会が1回追加されているので、議論の機会は当初よりも1回増えてはいるので、そこでも思いますけれども、本日のところでどうですか、皆さん、結局のところ何学級とか、どこに置くとか、内容をどうするとかという話は後回しなんだけど、結局今後も2校をこのままの形で維持していくのか、それとも、何らかの形で統合する、その統合の形としては、今日出ている主な意見は統合後に1つの高校として新設をするという、こういう意見であったかというふうに思いますが、この辺り、今日県教委さんのほうで用意していただいた基本的な方針の、今どれにも当たらないことを私言ったんですけれども、特に2ポツ目です。基本的な方針2ポツ目で、1学年2学級の江津高校と江津工業を統合して、新たに1学年3学級のというところまでは、多分今日の議論ではいけないと思います。だけど、いずれにしろ江津高校と江津工業を現在の形で維持するか、それとも2つの高校を新たな高校として設置をするかというところについては、少し方向性があるような気もするので、その辺を、あまり性急に決める気はないんですけど、皆さん方の印象はどうですかということをお伺いしておきたいと思えます。いかがでしょうか。

今日、御質問いただけなかった方もいらっしゃるもので、もしよろしければ一言ずつ御意見をいただければありがたいと、さっと回していただければ。決め切れませんでしたら決め切れませんとおっしゃっていただければいいと思えますけれども、いかがでしょう。

## ○委員

先ほどの4人の方の話からも、いずれは統合するだろうというところは、もう心積もりはある程度あるのかなというふうに私も感じたところがございます。それぞれの、今、江津高校であったり江津工業であったりという魅力化に向けていろいろ活動されている中で、今回新聞発表でぼんと出たような形で知ったという方が非常に多くて、今まで応援されて

きた方、江津高校は地域を挙げて応援してきているみたいな状況がある中で、もう統合しますよというふうな急な話であったというので、結構不信感を持たれているというふうな印象を受けております。今後、いずれはそういうことを統合に向けてという形に進めていくんでしょうけれども、しっかり、子どもたちのことを一番に考えるのは当然なんですけれども、それを支える地域というのを、今、藤田さんもそうですけど、一生懸命、高校それぞれ頑張ってくれてという形で後押しをされていたというところの方々にもしっかりと説明しながらというところも必要になってくるんじゃないのかなというふうに思っておりますし、もう1点、あと、実際に学ぶ子どもたちというところですね。今その子どもたちの話を聞いても、その子たちはもう卒業していくんではあるんですけども、子どもたちがどういうふうに考えているのか、どんなところで学びたいのか、何を学びたいのかというところも、意見を聞きながらしっかりと話を進めていっていただきたいなというふうに思っております。

#### ○委員

2校維持か新設校かというところでいきますと、私は新設校かなというふうには、今日の話聞いていて思いました。ただ、前回もお伝えしたとおり、やっぱり一般的には統廃合というのは1足す1は2未満になりがちなところがありますので、やっぱり1足す1が2以上になっていくように、今日は産業人材の育成というキーワードが出ていましたけれども、この江津地区として、どういった子どもたちを育てていきたいのかというところを改めて定義づけをしながら、そこに探究という島根の強みをどう生かしていくのか、こういった観点から細かい学校の仕組みとかをつくってあげれば良いと思うんですけども、基本的には新しいものをつくっていくというのがいいんじゃないかなというふうに私は思いました。

#### ○委員

私も存続か1校にするかということ言えば、新設校1校にするべきかなと今判断はしています。当然、今までにない学校というところが強調されていますので、新しい魅力のある、子どもたちが輝ける教育ができる場だということが前提ですけど、この案でいいかなというふうに今のところ感じております。

#### ○委員

江津高校、江津工業、それぞれこれまでの伝統とか実績もあるので、それを生かしながら、若干規模を調整するという形で統廃合する。新設校とするかどうかというのは、これ

は考え方の問題で、私は原案のとおりで、江津工業を2クラス、江津高校1クラス減と、これで統廃合するということで、基本的なスキームはこれでいいと思っています。

#### ○委員

私は、統廃合とか新設校であれば、やっぱり2校とも廃校にして、もう新しく新設校を立ち上げるというか、つくっていくというものが一番いいのかなって、お話を聞きながら思っていました。でも、いろんな両校がこれまで築き上げたものがたくさんあったので、それを生かしつつ、それをどのような魅力にしていくか、それはやっぱりこれからの子どもたちが選んでもらえるような学校をつくっていかなければ、それは子どもたちに限らず保護者も、その意見も大事にしていかないといけないので、今回いろんな方の意見は聞かせていただいたんですけども、やっぱり子どもたちの意見とか保護者の意見が、もうちょっとこの中にもほしかったなと思います。

#### ○会長

今の意見は、今日この場では流れは決めずに、保護者の意見や子どもの意見を聞かないと決められないという御判断ということで。

#### ○委員

それは違います。私は新設校のほうに。

#### ○会長

中身についてということですか。

#### ○委員

はい、そうです。

#### ○会長

はい、分かりました。ちょっと確認させていただきました。

#### ○委員

今日は4名の方のお話を聞いて、なるほどと思うところもたくさんありました。最初は、私の中では統合という頭しかなかったんだけど、新設校というのは、ああ、なるほどというふうに、ちょっとそれはやっぱりいいなと思いました。

#### ○委員

ちょっとよく分からないです。どっちがどうなのか分からないんですけど、ただ、今までと違って、これからは多分島根県の中にある江津の高校ということで考えていって、江津地区の、自分たちのっていうのではなくて、島根の江津地区にある公立高校ということ

で考えを進めたらどうかと思います。

## ○委員

私も新設校をつくるほうが、長期的に考えても、島根県にとって新しいものを発信できる、新しい教育の在り方を挑戦できるという意味で、新設校をつくるほうに賛成ではあるんですけども、安易な統合には反対という、この反対の仕方から見ても、やっぱり保護者の受け止めとしては、この人数だと仕方ないから統廃合せざるを得ない、そして、私が被害に遭う人という、多分そういう立場の方がたくさんおられると思います。何か教育に熱心で、教育について考えることがそもそも楽しかったりというような立場から考えると、きっと新設校というのがぴんとくるんでしょうけども、そうではなくて、取りあえず子どもを高校に行かせたいとか、学校から通える範囲でぎりぎりで行ってほしいという、そういう価値観の家庭ももちろんあるでしょうから、そういうような形で、いろんな立場の人のニーズに合った学校というのを考えると、やっぱり学校からすぐ通えなくなるだとか、工業にそもそも行こうかなと思ってた人はいいんだけども、普通科でというふうに考えていた人たちがこの新設校をどう捉えるか、そうすると、そう考えるんだったら、もう違う学校に行ったほうがいいなというようなことにならないように、この魅力というのをいろんな人たちに、どんなふうに伝えられるメッセージにしていくのかというところがキーワードになってくるんじゃないかなと思っています。

## ○会長

ありがとうございました。

一応皆さんの今日の意見の流れとしては、県の方針の中での確認できることは、2つの高校を統合する方向で話し合いを進めてはどうかということについては、ほぼ一致している。ただ、統合した形について、県教委が示されている新設校のイメージとして表に書かれたものは、工業が2学級、現行のですね。普通科が1学級、それをがっちゃんするというような感じに取れるし、それから、工業の中身についても今日少し異論が出ましたので、この表そのものを肯定するわけではなく、何らかの形で魅力的な新設校をつくっていく、統合して新設校をつくっていくというふうに、今日方向としてはまとまっていると思うんですけども、何を内容として何学級どうしていくというところは、ちょっとテクニカルなところもあるので、次回事務局に少し整理いただいて、その方向性の中に原案が幾つかあり得ると思うんですけども、こういうパターンどうか、ああいうパターンどうか、その辺を少し示していただいて、どれをたたきに進めようかと

いうところで、この統合して新設という話を少し具体化していきながら確認させていただくという作業にしてはどうかというふうに思います。

幾つかやり方が私の中でも浮かびますので、その辺を事務局で案として整理していただいて、それをたたきにして確認をしながら次回の議論を進めてはどうかと、ただし、次回の議論の中に2校そのままという案は恐らくないだろうということで、そこはよろしいですか。そこについては確認をさせていただいたという形で進めさせていただければというふうに思っております。

以上を本日のまとめにさせていただきますして、事務局のほうにお返しします。